言ひ換ふれば、説話的繪畫的な輪廓中で、中心の像が益重要な地位と役目とを占めて、恰も之が一の偶像となつて他を拂ひ除けようとしてゐるかの如きものがある。而して此の傾向が進むに從つて、佛教々團中で、偶像の傾向が漸次物語風な浮彫の傾向から遷つてゆく樣になり、彫刻家は場面を寫す事をしないで、殆んど聖像のみを作る位になつてゐる。

我々の特殊な見地からすれば、斯の如きものが、印度佛教美術發達の窮極する所であらう。之は今見た樣に、其の根源は犍陀羅自身にあるが、之とて、信仰の叙述的な現はし方を、後に至つて、之から離した圖像が數を增して來たものであるが、之等の圖像は、常に釋迦牟尼佛か、或は他の過去六佛か、更には、未來佛彌勒かに限られてゐるので、最も遲れた彫刻で、觀世音菩薩像が出來かけてゐる位になつてゐる。而してベナレス附近のサールナート Sārnāth に至つて、紀元四五世紀の思惟佛及び思惟の菩薩の眞正な像に始めて新しい特に佛教的な群像の最も確かな要素を見る。(サールナート發掘の結果は「印度考古學調査會年報」中に發表してある。) 次いで、アヂャンタート Ajanta 窟の